

「データドリブン経営」実現のカギを握る マスターデータ管理 (MDM) の 導入ポイント

デジタルトランスフォーメーション(DX)やデータドリブン経営実現のために、データ基盤の整備は欠かすことができません。その際に重要となるのが、マスターデータの適切な管理と運用です。マスターデータの不統一や不備は、分析結果にも影響を与えることになり、正しい意思決定の妨げにもなります。マスターデータ管理(MDM)プラットフォームを提供するStibo Systemsの木庭袋 圭祐氏と、NSWでデータマネジメント事業に携わる田中 梓が、MDMの重要性や具体的なソリューションについて意見を交わしました。

レガシーなシステムが、 データ管理の足かせに

——データの重要性が叫ばれ、多くの企業が「データドリブン経営」を目指しています。その際に重要なことは、どのようなことでしょうか。

田中： 将来を予測することが困難なVUCA (Volatility : 変動性、Uncertainty : 不確実性、Complexity : 複雑性、Ambiguity :



NSW株式会社
サービスソリューション事業本部
ビジネスプロセスサービス事業部
デジタルプラットフォーム部
副部長
田中 梓

曖昧性)の時代といわれています。こうした先行きが不透明な時代においては、企業活動におけるさまざまなデータを収集し、可視化・分析を行い、意思決定や企業戦略の策定、顧客満足度の向上に役立てる「データドリブン経営」の実現が急務です。

そして、データドリブン経営を実現させるには、マスターデータ管理がカギを握っていると思ってい

ます。つまり、正確で最新のデータ(ゴールデンレコード)を扱い、それに基づいて意思決定や迅速なアクションができるようにするためのデータ管理の仕組みが必要です(図1)。



Stibo Systems株式会社
プロフェッショナルサービス部
ディレクター
木庭袋 圭祐氏
きばくら けいすけ

木庭袋： 企業がもつデータには、商品一覧や拠点情報、従業員情報、取引先情報などがあり、このようなさまざまなデータが各システムに散在しています。これらを1カ所に集約することで、企業活動の「軸」として機能させることができます。この軸がブレてしまうと、正しい活用・分析ができなくなります。データを活用する前に、「データが正しく整備されているか」「すぐに活用できる状態であるか」といった視点を持つことが、とても重要です。

——企業のデータ管理の現状を、どのように見えていますか。

木庭袋： データ管理が属人化している、または手作業に依存している企業が多いと感じています。データを個人の表計算ソフトで

管理していたり、スクラッチ開発の仕組みで管理していたりといった具合です。一方で、データを経営の軸に据え、MDMプラットフォームを導入している企業も増えてきました。

日本企業は古くから情報システムに投資しはじめ、今日まで当時のデータアーキテクチャを更新しながら使い続けているものも数多く残っています。これが、新しいデータアーキテクチャを構築する足かせとなっています。レガシーなシステムをいかにモダナイズするかが現在の課題だと思います。

田中: おっしゃるとおりですね。レガシーなシステムをモダナイズしようと思っても、データのクレンジングやコードの変更などが求められる、非常にコストがかかる状況に追い込まれているのが現状です。

木庭袋: システムをモダナイズするときに重要なポイントは、「刷新したシステムや整備したデータを、ビジネスの観点でどのように生かしていくか」を意識すべきだということです。

一口にマスターデータを整備すると言っても、事業部門ごとに必要となるデータは異なります。全てを整備すると、大きな作業負荷がかかります。そこで、ビジネス上の観点から「何のデータを整備すべきか」、つまり「必要となるマスターデータは何か」を明確化し、最適な整備方法を検討することがポイントです。

これらを検討する上では、「Why(なぜ)」「What(何を)」「How(どうやって)」という順番で進めると良いでしょう。そしてWhyに該当する部分は、全社共通の認識を持っておくべきです。

MDMで実現する データ管理のモダナイズ

——MDMを選ぶとき、運用するときのポイントをお聞かせください。

田中: データ活用のためにデータ基盤の整備を行っていくときに、1つの解決策となるのが「MDMプラットフォーム」を導入することです。これによって、レガシーシステムと先進的なシステムを統合できます。MDMプラットフォームは、レガシーシステムのデータを有効活用する上でも重要な役割を担っています。

木庭袋: MDMプラットフォームを導入する上では、経営層のコミットメントがどれだけあるかが重要です。マスターデータの整備は全社レベルで取り組むべき課題なのです。部門ごとにマスターデータを整備すると部分最適に留まってしまいがちになります。

田中: ユーザービリティも重要ですね。せっかくMDMプラットフォームを導入しても、自社の事業内容に合っていない、ツールをよく知っている人でなければ使いにくい仕様では、全社的なデータ管理の実現につながりません。例えば、ローコード開発ができるなら、ITリテラシーが高くない担当者でも、容易にマスターデータを一元管理したり、メンテナンスしたりする仕組みを構築できます。

木庭袋: データ活用の目的を達成する手段としては、整備したデータを活用する作業を自社で行えるような体制をつくることも重要になります。企業の財産であるデータの整備・運用を自社内で行えるようになることで企業競争力を高められます。

その際、マスターデータ管理の運用に特化した組織横断のCoE (center of excellence) の結成を検討することが有効です。組織横断でチームをつくることで、全社レベルでデータを構築していく意識が芽生えてきます。チームのかじ取り役として機能するのはIT部門ですが、現場部門の課題をよく知っている人材を投入することで、協力体制はより強くなっていきます。

また、マスターデータ管理への取り組みから最大限の価値を引き出すには、マスターデータを正規化し、最新の状態に保つため

マスターデータ管理がデータドリブン経営の鍵を握る

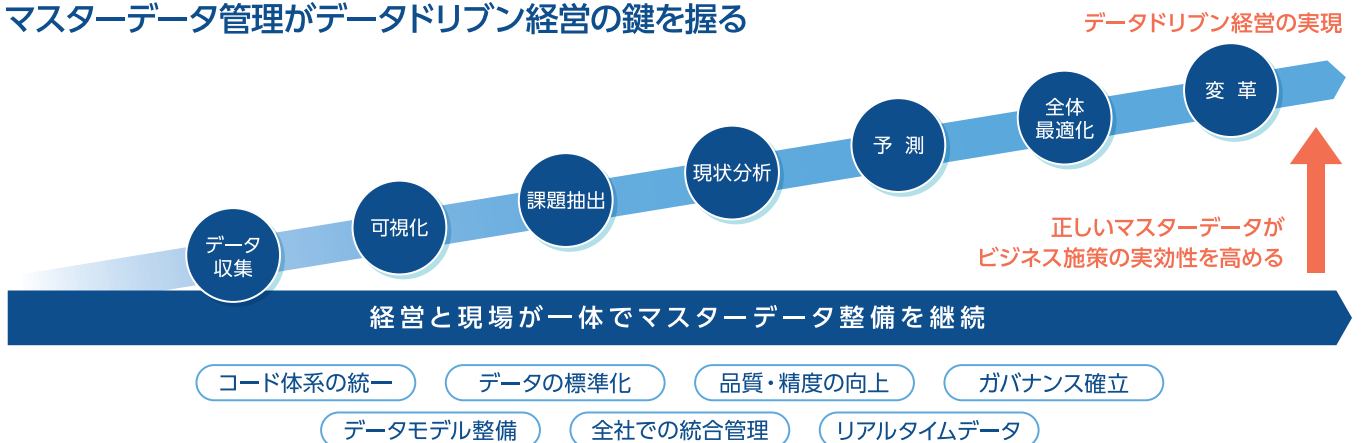


図1：データドリブン経営に向けたデータ管理の仕組み

に改善サイクルを継続することが大切です。必要な時に必要なサポートが受けられる、信頼できるベンダーとパートナーシップを組むのが重要になります。

田中：その意味において、Stibo Systemsが提供するMDMプラットフォームと、我々NSWのサポートは、お客様に大いに役立っていただけそうですね。

課題に柔軟に対応できる MDMプラットフォーム

——Stibo Systems MDMについて、その特長や優位性についてお聞かせください。

木庭袋：Stibo Systemsが提供するMDMの特長は、大きく3つあります。

1つ目は、マルチドメインのマスターデータ管理をシングルプラットフォームで実現できることです。多くのMDM製品は、異なる

製品の組み合わせで構成されているため、例えば、取引先データと商品データで管理の仕方が異なることもあります。Stibo SystemsのMDMであれば、取引先データや商品データなど、マルチドメインのマスターデータを同じUI上で、同じ操作感で管理できます。またマルチドメインMDMでは、複数のデータを関連付けながら管理することができます。Stibo SystemsのMDMでは、例えば、製造拠点のロケーション情報と出荷先の情報、商品情報を全て関連付けて管理可能なため、ビジネスの実態に近いデータ管理を表現できます。

2つ目は、ローコード開発ができる点です。Stibo SystemsのMDMは、現場部門の担当者にとっても使いやすく、柔軟性にも優れているため、要求の変化や追加にも素早く対応できます。そして、3つ目は、SaaSで提供していることです。企業のIT担当者は、インフラを運用・管理する手間を省けます。売り上げや顧客満足度の向上といった、ビジネス目標の達成に向けて、必要なデータ管理に集中することができます。

田中：Stibo SystemsのMDMを扱っているNSWとしても、こう

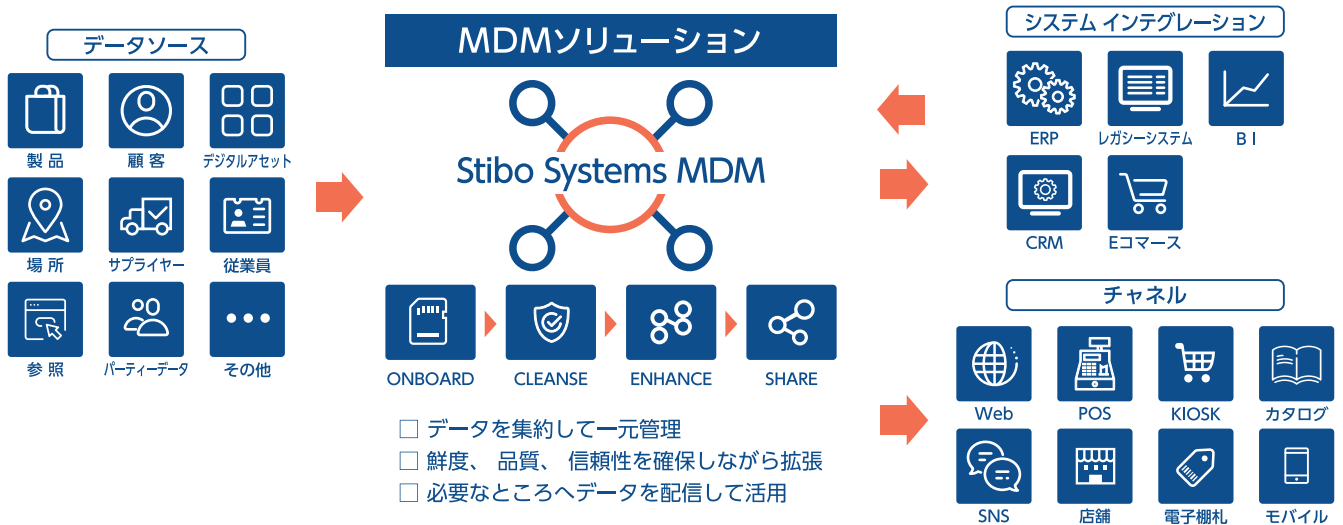


図2：Stibo Systems MDMの概念図

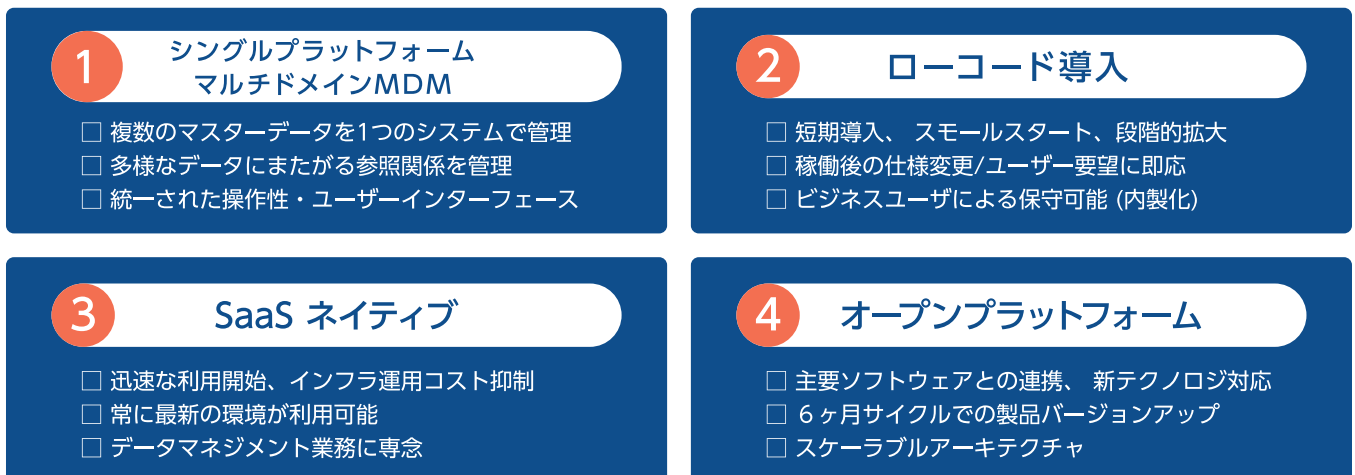


図3：Stibo Systems MDMの優位性

した特長があるからこそ、企業のマスターデータ管理の課題を柔軟に解決できるのだと思っています。また、拡張性に優れているのも大きなメリットだと捉えています。頻繁なバージョンアップにより常にプラットフォームが進化し、他システムとの連携も強化されます。グローバル展開も可能なので、海外拠点を有する企業にも適しています。

データマネジメント全般にわたり、NSWが伴走支援

——Stibo Systems とNSWの協業事例についてお聞かせください。

木庭袋：あるプロジェクトではStibo SystemsとNSWがタッグを組んで、お客様のマスターデータ管理の課題解決をサポートしました。Stibo Systems MDMを活用してデータを整備することで、原料調達や販売チャンネル全体の課題点が可視化できたと、喜びの声をいただいています。

田中：Stibo Systems MDMなどのテクノロジーの導入は、データドリブン経営実現のゴールではありません。あくまでも全社的にデータを活用・分析することで、全社レベルの課題や部門レベルの課題を解決することが目標です。NSWでは、そのための重要な基盤づくりとして、マスターデータの管理・活用のサイクルを回せるよう伴走支援しています。

MDMを導入している企業はまだ多くはありませんが、将来的に必ず必要となるプラットフォームです。Stibo Systemsとともに、数多くのユースケースをつくっていきたいです。

木庭袋：一般的に、お客様は多くのITベンダーを抱えて複数のプロジェクトを推進しており、そのマネジメントだけでも相当な負荷がかかります。MDMの活用推進を伴走してくれるNSWのようなパートナーがいればとても安心できるでしょう。

——データドリブン経営実現のためにデータマネジメントに取り組むお客様にメッセージをお願いします。

木庭袋：マスターデータの整備と活用が、データドリブン経営を実現する核となります。管理しているマスターデータをいかに活用し、経営視点で自社の施策に取り込めるかが、データドリブン経営の成否を分けることとなります。全社レベルでの取り組みを継続させる工夫も必要となります。こうした悩みを解決するのがStibo Systems MDMです。長年の経験と実績のあるマスターデータ管理専門のテクノロジー企業として、お客様の大切な資産であるデータの価値を最大限に引き出せる仕組みづくりをこれからも支援していきたいと考えています。

田中：データ管理を自社で賄いたいと考えていても、日々の業務に集中すべく、サポートを外部に委託しているケースが散見されます。NSWでは、これまでに培ってきた経験や実績、ノウハウを生かして、お客様のStibo Systems MDMの導入・運用を伴走支援いたします。

また、「データ収集」「データ管理」「データ活用」にいたるデータマネジメントのプロセス全体をワンストップでサポートし、お客様のデータドリブン経営の実現に貢献いたします。

